



使徒の働き 19:21-28:



使徒行伝の19章21節から最後まで4段落目の分類の区分をしています。19章の最初で「パウロは霊に感じて、マケドニア、アカヤを通してエルサレムに行く。そこからローマに行かなければいけない。」とあります。エルサレム、そして、ローマということで、この大きな段落が始まります。途中のところにも、「主がエルサレムで証したようにローマでも証しなくてはならない。」というのが23章の最初にあります。この「エルサレムを通して、そして、ローマへ」というのがこの段落です。

アルテミスの神殿での話とか、トロアスでパンを割く話とか、ずっと旅が続いていくので、その場所を把握したほうが全体が見えるかなということで、この地図になっています。19章21節からは、エペソ、アルテミスでの話です。そこから出て、マケドニアを通過してトロアスに行きます。パンを割いて最後の食事、最後の晩餐をして、ミレトを通過して最後の教えをして、それでカイザリア、エルサレムという順番です。エルサレムでヤコブに会って、追いかけてきたユダヤ人達に弁明をする。それで暴動になりましたので、千人隊長に守られて、ペリクスの前、フェストの前、アグリッパの前で弁明する。これがエルサレムからカイザリアというところですよ。このカイザリアで、フェストの前、アグリッパの前で、パウロはローマで裁判を受けたいと言いましたので、ここからローマに行く話がずっとあります。民数記のどこからどこに行ったというような形で、場所を知らないとかちこちに行ってるだけの様な文章のように見えてしまいます。とにかく、ずっと行って破船に合うけど、そこから連れ出されてローマに行きます。

使徒行伝 19:21-28:

2017.8.24

エルサレムを離れてローマへ 19:21-20: 異邦人たち (エペソ)	最後の晩餐をローマで 最後の晩餐をエルサレムで	主イエス (ルカ) エルサレム人 (19:31) ルカ 22: 逾越の食事
21:-23:10 イスラエル人 (エルサレム) 22: ダマスコの光 異邦人に向かう	エルサレムで縛られる 大祭司長老、ユダヤ人が引き渡す	ルカ 23: 大祭司アンナス、カヤパ
エルサレムを離れてローマへ 23:11-26: 王たち、総督の前 (カイザリア) 26: ダマスコの光 この民と異邦人に	千卒長ルシヤ、総督ペリクテ 総督フェスト、アグリッパ王	総督ポンテオ・ピラト ハロデ王、百卒長
27:-28: 死と復活 (ローマ) 異邦人に向かう	() P. 30+ 食事 28:23 モセと預言者	ルカ 24: 三日目 モセと預言者
9:15 ダマスコのパウロに 異邦人たち、王たち、イスラエルの子らに主の名を伝える選びの器	ルカ 24:12 池畔に、会堂や牢に閉じこめられ、主の名を伝える王、総督の前	

アジアのあたりの話、カイザリア、エルサレムでの話、エルサレムからカイザリアに戻る話、それとローマに向かっていくという話。この4つに分けられるだろうということで、最初は異邦人たち(19:21-23)。次にピリポの家とかアガボとかが出てきます。これはカイザリアでの話ですけど、エルサレムで縛られますよという話をしていますから、カイザリアという場所ですけど、これはエルサレムの話という事でここで証をします(21:-23:10)。次に総督たちの前で証をすることになります。ここで2年とどまって、もう一度ということですね(23:11-26:)。27章は船に乗ってローマに連れて行かれるところ。船から上がって蛇が噛むけれども救われるという話が終わって、ローマに住むことになりました(27:-28:)。この4つの大きな流れですね。この2番目(21:-23:10)と3番目(23:11-26:)のところには、22章と26章のダマスコで光を見たというパウロの洗礼です。罪が許されて新しい使命が与えられた。異邦人に向かう、この民と異邦人に光を述べるという責任が与えられたという証が、この2つの段落の中に入っています。

9章15節で、最初のダマスコの時にパウロに言われました。「パウロは異邦人たち、王たち、イスラエルの子らに、主の名を伝える選びの器です。」とアナニヤに伝えていと言われているので、異邦人たち、イスラエルの子ら、そして王たちの前で証をしているというのが、この最後の4段落目の中に出てくるものだと思います(27:-28:)。

「異邦人たち、王たち、イスラエルの子ら」という言い方をしたら、イスラエルの子らの中に、信じるユダヤ人と、信じないユダヤ人がいます。ユダヤ人がみんな信じなかったというわけじゃないです。信じているユダヤ人と、信じないユダヤ人というふうに分ける分け方があります。それと、元々エルサレムにいましたけども、そこからバビロンに連れられて行ったり、戻ってきてまた散らされているというディアスポラですね。エルサレムにいるエルサレム中心のヘブライ語を話すユダヤ人と、各国に散らされ

で行ってギリシャ語を話すユダヤ人達という2つのグループの分け方もあります。これがそれぞれディアスポラの方にも信者と不信者はいますし、ユダヤ人、エルサレムの方にも信じる者、信じない者がいますので、この辺が混ざってユダヤ人という風に言われていますけど、どのユダヤ人達に向かって言ってるのかをよく見ないといけませんね。ローマにもすでにいたようですね。

使徒行伝の最初の御霊が降るところで、敬虔なユダヤ人が全世界から集まってきましたというところで、いろんなこういう国のところが出ています。その中にローマも入っています。ですから、そういう人達の所に誰が伝えたかは分かりませんが、キリストの福音はパウロが行く前に、手紙を送る前にもう伝えられているということも、手紙などで分かるかと思います。

「最後の晩餐、トロアス」「最後の教え、長老たち」そうすると、もちろんすぐに思い出すルカ福音書ですね。主イエスの人生の最後のところです。意外と早い段階でルカの9章で「これからエルサレムに向かって行きます。顔をエルサレムに向けて」というところから後半が始まっていきますけど、特に22章の過ぎ越しの食事、教え。それと、23章で、大祭司アンナス、カヤパ、ピラトの前、ヘロデの前で証言をする。それで、24章の復活するところで「3日目に、3日目に、3日目に」と。27章、28章にも「3日目に、3日目に」と。最後何をしてるかという、モーセと預言者によって語られたことを神の国の福音を教えている。パウロも28章のところにあるように、モーセと預言者を通して証明してるということがあったりします。

ルカの21章のところで、イエス様がこれから迫害を受けますということを言う時に、迫害され、会堂や牢に引き渡され、主の名のために王や総督の前に出されます。王や総督の前に出されていますね。こういうことが、そのままこの時代にももうすでに実現しています。この後にも、さらに迫害が厳しくなって、こういう人たちはパウロ以外にもたくさんいるということになるんだと思いますけれども、その迫害の時代が来るよということを預言されているということです。主イエスの新しい頭としての創造。エルサレムに行って、ダビデの子がメサイアとなる。メサイアとしてあらわされる。古いイスラエル人から新しいキリスト人が生まれるという最後のところ。この2つが似ているということですけども、4つの段落に分けてみるのが良いのだと思います。